

毛沢東の死と北京政変—情況と展望—

現代中国問題研究の第一人者が説く
北京政変とこれからの国際情勢



“解き放たれた死”

毛沢東死後、中国で劇的な政変が起こったわけであるが、一般に、文化大革命が勝利し、その「新生事物」が中国社会の隅々までゆきわたって新しい社会変化をもたらしたというような中国イメージがマスコミを通じて強かっただけに、多くの人たちは戸惑ったことと思う。

しかしながら、少なくとも過去一年間ぐらいの中国の情況をリアルに分析してみると、今回の事態は、そのシナリオの個々のプロットはともかく、その大筋はある意味では予想し得たもので、私自身、毛沢東の死を「解き放たれた死」と表現した。つまり、まさに

中嶋嶺雄

(東京外語大助教授)

毛沢東の死を期して待つべき状況が中国にあったわけで、ある人たちは、さあこれから自分たちの出番だ、と感じたであろうし、またある人たちは、これからどうなるんだろう、大変だという危機感にとらわれたことと思う。多くの中国民衆にとっては、一つの時代が終わったという、ある種の解放感を感じたに違いない。こうしてそもそも毛沢東の死は、「解き放たれた死」であったと言えると思うわけである。

従って私自身は、「毛沢東体制は解体する」(朝日ジャーナル)とか「毛沢東時代からの決別」(諸君)と題する論文を、毛沢東の死に際して書いたわけであるが、それはまさに毛沢東の死を期して待つべき緊迫した状況を権力中枢に認めていたからにはかならない。

華国鋒政權は今回の北京政変によって更にクローズアップされたわけであるが、華国鋒の政治的中根への上昇は、周知のように、この二月周恩来亡き後の國務院総理代行という形でその人事が確認された。

華国鋒はそもそも昨年夏から秋にかけての「農業は大衆に学ぶ全国会議」で、右の鄧小平と左の江青が論争して対立したとき、彼がいわば中間的な立場から総括報告をしたことが公表されていることからわかるように、彼自身いわゆる文革派でありながら、ある種のバランスとして台頭してきたようである。従って、周恩来亡きあとの首相専任をめぐる、調整が困難なときに、党内序列一四位、國務院副総理人事の序列からしても第六位であった華国鋒が一躍クローズアップされたということにもなったわけである。このように、華国鋒自身は、いわば政治的妥協の産物として出てきたわけである。

そして同時に走資派批判のキャンペーンが開幕したわけであるが、しかしながら、『人民日報』とか『紅旗』というマスメディア、北京大学、清華大学という大学のキャンパス、あるいは大衆の農業生産大隊、大慶油田等々の文革派の拠点では走資派批判が沸き起こったにもかかわらず、全体的にはむしろ走資派批判に対する抵抗を見てとることができた。つまり、それほどまでに中国社会の底辺には毛沢東政治への抵抗が潜在していたといえよう。例えば昨年夏の杭州事件に表われていたように、つまり、貧困のユートピア、とでも言えるように、毛沢東思想を絶対化して、低賃銀のままで、毎日のように「階級闘争」あるいは「継続革命」という、いわばイデ

オロギー的な理念をとなえているだけという、そういう政治なり社会に対して、具体的な賃上げ要求によって、民衆の間から反発があった。このことに現われているように、周恩来が全国人民代表大会で提起した、いわゆる「四つの現代化」——工業、農業、国防、科学技術の現代化という方向をもっと全面的に推進すべきだという意見、それに対する期待が非常に多かつたと思う。そうであるだけに走資派批判のキャンペーンはなかなか思うように進んでいかなかったのである。

毛沢東政治への批判——天安門事件——

このような情況の中で起こったのが、去る四月の天安門事件であった。この事件は、まさに毛沢東政治への批判というものがいかに根強く潜在していたかということを示したものであり、あの事件のクライマックスは、天安門の樓上にかざつてある毛沢東の写真と同じ高さに人民英雄記念碑の頂上に周恩来の写真がかけられたことである。そして、その周恩来の写真のところに赤い小瓶がつるされていた。小瓶は中国語でもシアオビンと言うが、鄧小平の小瓶もシアオビンと言うわけで、つまりその小瓶は鄧小平を意味していたのである。そういう中国人らしいウィットに富んだレジスタンスであつたわけで、周恩来・鄧小平路線に対する民衆の強い支持の気がそこに現われていたと言えよう。と同時に、周恩来が、粉骨碎身して公の政治に尽くしたにもかかわらず、一体現在の毛沢東政治、とくにその側近たちは何だという民衆の批判が湧きあがつたのである。例えば『人民日報』も反革命の言辭として当時は紹介し

ていたけれども、秦の始皇帝の時代は過ぎ去った、というような表現、あるいは毛沢東の二番目の妻である楊麗慧夫人——革命の犠牲者になった人であるが——を讃えるスローガン、これは江青夫人に對する痛烈な批判であつたわけであるけれども、このように江青や姚文元を指す批判がいろいろな形で、あふれ出たわけである。これがこの事件の核心であつたわけで、しかもそれが、単に数千、数万の民衆ならともかく、延百万にものぼる民衆が、そういう反乱に加つたのである。これは大変な出来事であつた。

この事件におどろいた党中央は、急拠鄧小平を失脚させたが、彼の党籍をはく奪することはできなかった。つまり党内には鄧小平の党籍はく奪に反対するグループがあつたわけで、そして華国鋒を第一副主席として前面にクローズアップさせたわけであるが、もう一つの結果として起こつたことは、いわゆる文革派の中で分裂が起こつていくということである。おそらく華國鋒、そして今回の事件の鍵を握つたと思われる汪東興政治局員——これらの人たちは、かつて文革派でありながら、毛沢東の側近である江青夫人ら四人組といつまでも一緒にいたら自分たちの将来は危ないと感じたわけで、そこで彼らと袂を別つてゆく。ここにすでに今回の事態の遠因があつたと言えよう。

華国鋒に「喰われた」江青

中国は、その後、いろいろなミステリアスな事件が起こつていく。ソ連大使館爆発事件とか、大火災があちこちで起こることとか、福州部隊の司令官である皮定鈞の怪死、そこへもつてきて七月下旬の

河北大地震というように、毛思想を唱えていれば、人は天に勝つていった中国で、それがそうでなかったということもたらした心理的な衝撃は非常に大きかつた、地震によってパニックが起こる。そういう情況の中で毛沢東主席のみ、ただ独り奔放な生涯を閉じたわけで、その瞬間から、「喰うか喰われるか」という非常に深刻な事態に立ち至つたと言わざるを得ない。特に江青らは、自分たちが毛沢東のあと主席になり、首相になるんだという、つまり権力の座を直接的に目ざしていくわけで、彼らは毛沢東の葬儀の二日前、つまり九月十六日から「既定方針どおりに事を進ぶ」という六文字のスローガンを『人民日報』に掲げ、いち早く先制攻撃的にプレスキャンペーンを行つた。このことがまた一つの問題を起していくわけで、結局、服喪期間についてさえ一致できないまま、しかも喪の明けるのを待たずに、いわば電撃的な「予防クーデター」が行われたわけである。

『人民日報』を見ると、「既定方針どおりに事を進ぶ」というスローガンは十月五日まで出ている。つまりその前日まで彼らが編集権を持っていたということで、結局本来は、四人組は自らの「私兵」である北京衛戍区八三四一部隊という、汪東興率いる親衛隊を持っていたわけであり、あるいは手兵としての「首都工人民兵」というものを持っていたわけであるが、彼らはみなすでに寝返つていくわけで、そこで最後になるのは毛沢東の甥の毛遠心率いる瀋陽部隊しかない、というような情況の中で五、六日を過ごしたが、結局それも駄目で一掃打尽に捕まつてしまつたわけである。

そもそも華國鋒自體文革派であり、彼らとともに手をたずさえて

きだわけであるが、それは毛沢東という権威の下でのことであつて、その権威がなくなつた暁には、いずれどちらが先に袂を別つていくにせよ、すでにこうなる情況が煮つまつていたと見ていいわけである。であるから逆に、四人組は民衆から浮き上がっていたけれども、権力中枢においては『喰うか喰われるか』の均衡した情況にあつたわけで、もし華国鋒が彼らをやらなければ逆に華国鋒がやられていたのであろう。それはかつての林彪事件を見ても明らかである。

従つて、江青グループのクーデター計画について、あとになつていろいろなことが言われているが、それは『予防クーデター』であつて、逆に彼らが一網打尽にされたのだと言えよう。

今回の事態は中国社会の政治的・社会的矛盾を反映して、権力構造が非常に流動的で、その角逐がきびしいということが、直接の原因であるが、もっと深い原因を探れば、これはある意味で、毛沢東王朝の中の直系、つまり江青が延安にくる以前から毛沢東の側近と江青がつくりあげた上海グループとの角逐でもある。

華国鋒政権の今後

華国鋒の経歴を調べてみると、すでに延安時代の初期から毛沢東の側にいるわけで、汪東興も毛沢東のボディガードとしていつも「黒子」のように毛の側にいる。毛沢東の表向きの秘書は陳伯達であつたが、汪東興は常に陰の人物として側にいた。そこへ江青がお色気を漂わせて毛沢東に近づいて来たわけである。毛沢東は、結局、彼女に奪つて、正妻である賀子貞を非常なみじめな目に會わせて江

青と一九三九年に結婚するわけであるが、その時すでに周恩来、陳伯達から汪東興、華国鋒に至るまで、二人の結婚に反対し、やがて江青が文革期に政治の中樞にのしあがつてきたことにも内心は反発を感じていたわけで、その反発が後に陳伯達も林彪も、同じ文革派であつてもはじき出されたということと同様、「喰わなければ喰われる」という事態の一つの重要な遠因をつくつていたように思われる。

考えてみると、四人組は、いずれもごく新しい時期に上海で江青がつくりあげた文芸サロンに入入りしていた文芸評論家、イデオログであつて、いわば毛沢東王朝の新参者であつたわけである。その点からも、こういう情況はあり得たのである。

ともかく文化大革命が一つの方向性を目ざしていたうちはいいけれども、すでに民衆の間から文革そのものに対する抵抗が起こり、毛沢東政権に対する抵抗が起こつた。その中で文革派自身がそういう形で分裂してゆく、これはまた一つの政治力学としては当然のことではないかと思われる。

華国鋒体制については、ある意味で華国鋒の経歴そのものが古くから毛沢東とかなりつながっていた。毛沢東王朝の直系であり、ひよつとすると血もつながっているのではないかも知れられている。そういうことが、今の華国鋒にとつて当面は非常にプラスしている。毛沢東思想の承継者として正統性（レジタマシー）を持つというわけである。

ところで華国鋒は汪東興とともに、党内で一貫して特務公安部門を歩いてきた人物である。中国共産党の特務公安関係というもの

は、日本の公安警察などからは想像もできないほど異質な、まさにゲリ・ペー・ウーとしての存在であつて、このような党内の特に閉鎖的な、しかも権力中枢を左右できる部門を歩いてきたという経歴がある。また彼は、党の書記として毛沢東の故郷である湖南省湘潭県に二十年間もいたわけで、この二十年間彼は党の書記であり、組織部や統一戦線工作に籍を置いた、いわば党專使者(アバラーチキ)であつた。このことが彼をしてやがて林彪事件審査委員会の秘書長という重責を荷なわせ、七五年一月中国の公安大臣に就任した背景になるわけであるが、またこういう性格であるからこそ、今回のように、電撃的な予防クーデターをまさに宮廷革命的に成し遂げることができただけである。そして、今日の中央警衛処の処長であり、同時に八三四一部隊のリーダーである汪東興とともに今回の事態をこういう形で完成したのであるが、このことは、実は中国社会の底流にある毛沢東政治への批判、文化大革命への批判、いつてみれば「四つの現代化」を中心とする開かれた中国への衝動——具體的に言えば、周恩来・鄧小平路線ともいえる——新しい中国を求めようとする社会集団、つまり毛沢東政治へのある種の拒否権集團であつた社会集団——熟練労働者、インテリ、テクノクラート、ピーロクラート、あるいは下方知識青年といった、いわば中国社会の将来を動かしていくであろうこういつた社会の底流と華国鋒体制の性格には、自ずと矛盾があるわけで、そこに今後、文化大革命をどう位置づけるか——すでに文化大革命から離脱する方向は出ているわけであるが——鄧小平そのものをどう位置づけるかというようなことをめぐって角筈が起る可能性も十分にあるわけである。

私は実は、今回の全般的な事態の背景に鄧小平が大きな役割りを果たしていたと考えている。彼にとつては、四月の天安門事件の時に反革命として糾弾された路線がもう勝利したわけであるから、「四つの現代化」にしても、その時のいわば反革命分子といわれた人たちは、「四つの現代化成りし曉には一夜宴を設けて酒を飲み明かそう」というふうな詩を書いていたが、その四つの現代化も再び復活してきたわけであるから、路線的には周恩来・鄧小平路線の勝利であり、従つて彼はそういう余裕の上に、今後自分が表に出るか出ないかということをも自分自身で判断できる状況にあると思われ。そうであるだけに、これらの問題を含めた、いわゆる実務派のグループ、そしてこの実務派のグループは今後決定的な動きをするであろう軍の実力派の中堅幹部、例えば陳錫聯、北京軍区司令、許世友・広州軍区司令、李德生・瀋陽軍区司令——これらの人は李先念副首相とともに湖北省黄安県出身の「黄安グループ」であるとともに一番リアルスティクな実務派のグループを形成して、かなりの軍の幹部を含めて大きな潮流になっており、この点からしてもやはり華国鋒は一つの限界を持つのではないかという気がする。華国鋒は当面、周恩来・鄧小平路線にますます妥協していくのではないかとも思われるが、その点は今後の情勢に注目したい。

日本に及ぼす影響

最後に、日本に及ぼす影響を考える上では、事態は北京の宮廷革命であつても、このことがもたらす対外的あるいは国際的なリバーセッションはとめどもなく大きいのではないか。

まず中ソ関係が流動化している。そして、華国鋒政権とソ連との関係改善への一定の可能性が出て来ただけに、アメリカはいま非常にいら立っているわけで、アメリカとしては従来のテンポ以上に米中接近を促進せざるを得まい。中ソ関係の改善そのものが、アメリカにとっての最大の悪夢であるからで、すでにそのような徴候が出ている。台湾と北京との秘密交渉という最近の情報は、私にはその現実性はないと思うが、そういうジレンマに立つアメリカが最も望む情報ではなかったかと思うわけで、マンズフィールド上院議員の訪中報告にもあるように、そういう方向で事態はいちはやく流動化してゐる。

ソ連は、今日の中ソ関係はマイナス百点であるという認識があるだけに、もしも改善されなくてももともとである、それがマイナス五十点、あわよくば零の地点になれば、かつてのプラス百点の時代はないにしても、少しでも中国を動かすことができれば、それだけでソ連の世界戦略の勝利であると考えうる強い立場にある。

そして、特に中国の実務派、かつての旧実権派の指導者あるいは軍の中の、これ以上の不毛の中ソ対立をチェックしようとする動きに対して、大いに期待をつないでいる。そういうソ連の呼びかけに対して、当面中国がかたくなに拒否しても、そのことを充分読み込みずみであり、対ソ改善を図るという動きに対しては、中国内部からもそれを受け入れなければならないいろいろな要因が出て来るわけで、軍の動きもそうであるが、第三世界の関係などでも、反米だけではだめで、反ソにもならなければだめだという中国のこれまでの主張は、第三世界の中で中国の孤立化、あるいはハノイと北京と

の亀裂の原因ともなっているだけに、そういう方向を是正せざるを得ないような状況が徐々に出てくるであろう。これはやはり国際社会を大変流動化させるわけで、それで、ひょっとすると、その中で、単に中ソ関係だけではなく例えばハノイと北京との関係の改善、あるいは北朝鮮と、北京との緊密化、そしてそれに日本共産党を含むというような、旧実権派的なレベルでの国際共産主義運動の、ある種の連帯感の回復つまり復元力が出てくるのではないかと
いう気もする。

現に、日本共産党も対ソ関係を改善し、やがて総選挙後には、中国との関係改善に動いていくかもしれない。

ソ連は「毛沢東一派」ということを盛んに批判していた。その「毛沢東一派」も打倒され、そういう動きの中で日本共産党も、「毛沢東一派」とだけ角逐があつたわけで、彼ら実権派とは、具体的に劉少奇、鄧小平、彭真などとは関係がきわめて深かつただけに、こうしたレベルで、ある種の復元力が出てくるかも知れないという展望は、日本にとっても、対岸の火災視し得ない問題を含んでいると言えよう。それだけに当面中国をめぐる情勢を充分註目していかなばなるまい。

(文責・編集部)

白 警

昭和卅六年七月二十五日第三種郵便物認可
昭和五十一年十一月二十五日印刷
昭和五十一年十二月一月発行(毎月一回発行)
第五十八卷 第十一号

自 警



12 月 号

(第五十八卷第十二号)

昭和五十一年十二月号